

マラマッドと〈沈黙の言語〉

——パネッサ夫人とカバツキイの「声」

米 山 益 巳

I

短篇集『魔法の樽』に収められた一篇『勘定書』（“The Bill”）の結末部近くに次のような一節が配されている。

松材で作られた棺が入口のドアからなんとか運び出されると、悲しみに打ちひしがれたパネッサ夫人が、よろよろとした足取りで出てきた。ウイリーは顔をそむけた。今では口髭をたくわえ、その上帽子を被っていたのでよもや気づかれることはあるまいとは思ったのだが。

「何が死因だったのかね」ウイリーは小さな声でアパートの住人に聞いた。

「知らんね」

しかし、棺の後を歩いていたパネッサ夫人には聞こえていた。

「年だったのよ」夫人は甲高い大きな声で答えた。（“‘Old age’, she shrilly called back”）。

ウイリーの「小さな声」すら聞きとれる、そんな近くを歩いていたのがパネッサ夫人だ。なのに何故に「甲高い大きな声」で答えたのだろうか。『ワインズバーグ・オハイオ』（アンダスン）のあの鬱屈した住人さながらの、無色ならざるかくある声で。⁽¹⁾『勘定書』を読むということは、この異なる「声」の含意を解説するその営みに等しいだろう。少々先走りすぎたようだ。順序としてやはりストーリーの概要を述べておく必要がある。

「レンガ造りの古びた安アパート」の建ち並ぶ、くねくねした「狭苦しい街路」の一角で、「壁の中の穴」にも比すべき小さなデリカテッセンの店を営む店主・パネッサは、「商売であろうとなんでであろうと、この世のことは全て人への信頼をもとにして動いているんです」、「お望みの時にはいつでも代金あと払いでお売りしますよ」、と向かいのアパートの管理人ウイリーに語り驚かせていた。そんな言葉はついぞ耳にしたことがな

かったのである。所が、その貴い「信頼」をウイリーは無残にも踏みじめるようなことをしてかすに至る。「信頼」をいいことに、代金未払いのまま（——所持金があった時ですら）ありとあらゆるものを次から次へと買い続け、とうとう積み積もったその額は、「83ドル」を超えるほどまでになってゆく。そんなある日、パネッサは微笑みながらも「内金」としていくらかなりとも支払ってもらえないだろうかとういりーに尋ねる。その日を最後にウイリーは、「街路を横切る」ことをぴたりとやめる。やがて、世は不景気の時代に入っていく。ウイリーが店の中に悄然と佇む、「床板の下から生え出たひよろひよろとした二本の葉のない灌木」さながらの「やせこけた」パネッサ夫婦を、そしてその「灌木」の向こうに、「空っぽとなった棚」を目にするようになったのも丁度その頃のことであった。

しかし、一介のしがいない安アパートの管理人ウイリーには、「余分な金」など得るすべがない。借家人のためにと「シンク」を直し「トイレ」を直したとて、チップすら入ってこないありさま。僅かな「給料」ですら家主によって減らされていた位だ。ある日、「メール・ボックス」を磨いていたウイリーは一通の手紙が入っていることに気づく。なんとそれはすぐ向かいに住むパネッサ夫人からの手紙であった。夫が病で倒れてしまった、残りはともかく、せめて「10ドル」だけでも返済してもらえないか、という文面の。今や店には「空っぽの棚」しか置いてないパネッサ夫人は、夫の治療費にさえ事欠いていたのである。読みおえるやいなや手紙を「ひき裂き」、その日は一日中「地下室」に籠ってしまっただウイリーではあったが、さすがに良心の呵責を覚えたか、翌朝くだんの「10ドル」を手に入れるべく質屋に「外套」を持って行く。しかし金を手にして勇んで帰ってきたまでは良かったが、時既におそく、パネッサは「小さな棺」の中の屍と化していて、「喪服を身に着けた二人の男」によって運ばれている。そして本稿冒頭の引用部がこのあとに続くという結構である。

マラマッドの諸作の例に漏れず、どこやら寓話じみた展開ではあるが、ここまでくればパネッサの死因がどこにあったかはもはやくたくたく述べるには及ばないだろう。要するに治療費がなかったからだ。ウイリーが驚愕を覚えたのも無理はない。パネッサを死に至らしめた元凶は、パネッサの信頼を裏切った自分の悪徳行為であったことを余りにおそく知ってしまったのだから。パネッサ夫婦の「生活の糧」⁽²⁾に留まらず、店主の命さえ奪ってしまったことをいやが上にも知るはめに陥ったのだから。いかなる償いをもってしても償いきれない、大罪を犯してしまったことをいやというほど思い知らされたのだから。「思いやりある言葉」をかけようとしながらも、言葉が口から出なかったのもさもありなん。「舌」が「木にぶら下がったくさった果実さながらに口の中でぶら下がり、心はと言えば黒ペンキを塗った窓ガラス」と化したのも。

しかし、言うまでもないことだがパネッサの死は、一人ウイリーを打ちのめしただけではない。パネッサ夫人とて同断、いやそれ以上のものがあつたはずだ。せめて「10ドル」だけでもと支払いを求めてきたその手紙が、単なる依頼の手紙にすぎなかったものではなく、実に「震えた筆跡」(“trembling writing”)の手紙であつたことを想い起こそう。『最後のモヒカン族』(“The Last Mohican”)において、スパゲティを食べていた食堂にしつこくもまたまた現われ、「プライヴァシィ」という「権利」を不当にも侵害する「無法者」・サスキントを前にして、「フォーク」を持っていたその手を震わせているフィデルマン、⁽³⁾あるいは『銀の冠』(“The Silver Crown”)における、「いかさま師、けちな魔術師」と口ぎたなくアルバートに罵られ、「客」から受け取った「感謝の手紙」を手を震わせながら読みあげているラビ・リフシツツの怒りにも酷似した、ウイリーに対する烈しい憤りの情動が、思わずして夫人の手を震わせていたのではなかったのか。商品を仕入れる資金さえなく、「空っぽとなった棚」しか置いてないそんな状況下であつてみれば、治療費を捻出するにはウイリーにいくばくかなりとも支払ってもらうしか手立てがなかったのだが、いつまでたっても望みが叶わない。かくして、そこに出来たのがまさに怒りの仕種、身振りそのままの震えた筆跡の手紙であつたのだ。尤もその「シグナル」を、「激しい怒り特有の兆候」(チャールズ・ダーウィン)として作中人物のウイリーがしかと理解しえたか否かは定かではないが。

「甲高い大きな声」で発せられた「年だったのよ」という夫人の言葉は、そのような憤りの頂に位置する言葉であつた。その言葉は字義通りに解するなら、パネッサはいわば「老衰」でなくなったということの意味する。「工員」の仕事をやめ、それまで蓄えていた「3千ドル」で「小さなデリカテッセンの店」を買い求め、「生活の糧」を得ようとしたパネッサはその時「63才」であつたと作中に明記されてい、しかもこの作品が『コメンタリー』誌に発表されたのが、今世紀中葉の1951年であつたことからすれば、パネッサ夫人の言う「年だったのよ」というその答えは、疑念を抱くにはおよばない偽りなき言葉として映ろうというものだが、しかしそのことは夫人の言葉に偽りがなかったことを保証しているのではさらさらない。内実はおよそ逆だ。夫人は、「年だったのよ」というその発話行為の伝えている明示的な言語メッセージを、「甲高い大きな声」という「音声の身振り」⁽⁴⁾をもって、実は暗々裡に否定していたのであるから。

事の経緯のやるせなさ、惨めさに耐えきれなかったパネッサ夫人は、自らを慰藉すべく言葉の空疎さは承知の上でかく言ったにすぎない。しかしウイリーに対する烈しい憤りがそんな言葉であつさり消えようはずがなかった。それもそのはず、夫は殺されたも同然の末路を辿つたのである。「10ドル」すら支払ってくれようとしなかったウイリーに。しかも、義憤を投げつけたい憎悪すべきその人物・ウイリーとは言えばそこに「い

ない」。憤懣やる方なき怒りは、いきおい増幅せざるをえない。かくしてパネッサ夫人は、単なる音声とは趣を幾重にも異にした、「周辺言語」(“paralanguage”)にその怒りを託し、それこそ吐き出さんばかりに表現していたのだ。呪詛はあくまでもウイリーという一人の人間に対してであったのであり、人為を超えた自然主義風の「非情な運命」(5)を、「宇宙」を統べる「この世の掟」(『白痴を先に』“Idiots First”)を呪っていたのではもとよりない。

ウイリーがこのすぐれて「疑似隠喩的機能」(6)を帯びた「甲高い声」という音調の喚起しているその意味を、怨念の込められたその声の意義を捉えそこねるはずがあるろうか。パネッサの善意、「信頼」を裏切り、いついつまでも代金を支払おうとしなかった己れの悪なる所業があつて、パネッサがこの世を去ったことを、今や知りすぎるほど知ってしまったのだから。「甲高い声」の「受信者」として、そこには何一つ不足はなかったのだから。言語メッセージを伝えるための手段たる「音声」が、時には言語メッセージをすっかり否定しさえする程の、強力な表現能力をそれ自体として持ちうることをよく認識していた語り手は、「甲高い大きな声」という音声上の特性を媒介とし、パネッサ夫人の言い難き無念の内を表現し、同時にウイリーの犯した重い罪をもあからさまにしていたのである。一見他愛なくも、情報伝達装置として価値ある機能を充分果たしうる、この「音声」なるものが、より複雑なコンテクストに配され、人物像の指標、ひいては物語展開の一つの大きな礎石ともなりえているのが、『借金』(“The Loan”)なるテキストだ。

II

声の性情たる「トーン」の伝達している情報価値が、言語の概念的メッセージが付与するそれを凌駕している、パネッサ夫人の「言葉」はそのようなものとして機能していた。つまりは、音声の質・形態がそれのみで極めて高度な表現能力を行使していたということになる。音声潜在させたそのような属性からすれば、発声器官こそ共有すれども、本来的には「言語とはなんら関わりをもたない」(7)と言ってもおそらく語弊がないだろう。「うめき声」というような一つの事象が、伝達内容をしかと有した、りっぱな表現媒体たりうることはすぐさま了解できようというものだ。「精白粉で作ったリープの白パンは、頭をクラクラさせるような甘い香りで、焼き上がるのはまだ先だというのに、既に沢山の客を招き寄せていた」という一文で始まる『借金』を解するのには、この「うめき声」という「音声上の情報」(8)が、重要な一つの手掛かりたりえているのも不思議はない。

粗雑な感は免れ難いが、便宜上例によってストーリーの概要を先ずは記しておこう。「惨めさで光り輝いたような顔」をして現われたカバツキイなる人物は、パン屋の主・リープの旧友であった。久し振りの再会を喜ぶ二人ではあったが、やがてカバツキイは言いにくそうに「咳払い」をし、おもむろに用件を語り始める。妻のために「200ドル必要なんだ」と。しばらく逡巡するリープ。実はカバツキイの借金依頼は、この時が初めてではなかったのだ。「15年前」にもカバツキイに「100ドル」貸していたのだ。しかもカバツキイは返済したと言い張ってはいたのだが、リープはそのことを認めていなかった。直ちに承諾する訳にはゆかない。かてて加えて「何もかも」が後妻・ベッシーの「名儀」となっていた。だが、その名に恥じない善人・リープ（“Lieb”）は、「悪事」は「過去」のこととし、妻・ベッシーにかけあう。カバツキイの連れ合い・ドーラは手術を要する病に伏してい、「200ドル」必要なんだと。ベッシーが答えを返す。「気の毒だけどお助けすることはできません。私達は貧乏人なんです。お金がないんです」と。旧友の窮状を救ってやりたいリープは、ベッシーをなんとか説得せんとする。だが、ベッシーの承諾はいつまでたっても得られない。挙句の果てに夫婦は激しい口論をし始める。二人の言い争いに耐えかねたカバツキイは、「もう帰るからどうか喧嘩はやめてくれ」と言い、更にリープの誤解を解くべく、事の「真相」を述べるに至る。「200ドル」の金は病に倒れた妻のために必要なのではない、「5年前」に亡くなった妻の「墓石」の購入代金なんだと。「手付金」として「50ドル」は支払ったが、残りの「200ドル」はその後のあいつぐ災いで今だに支払えず、そのためこの「5年間」妻は墓石のないまま墓地に葬られているのだと。「真相」を知ったリープの眼には涙が「湧き出る」。さしものベッシーもその痛ましさに「心を動かされ」、涙を流して同情する。しかし、拒絶の意志を翻すには遠く及ばない。今でこそ細々とながらくらしゆける身になったとは言え、幾多の辛酸をなめてきたベッシーは、そして生命保険にも入れない体の弱い夫をもったベッシーは、行く末の不安をついに拭えなかったのである。かくして、カバツキイはやむなくリープのもとをあとにする。

大略このようなストーリー展開を持った一篇である。金銭問題というモチーフを共有した先の『勘定書』にも似て、この一篇もいかにもマラマッドらしい、なんとも哀切味漂う物悲しい一篇である、と言いたいところなのだが実はそのような捉え方があまねくなされてきた訳ではない。そのような「素朴」な読みとはおよそ両立しえない、そんな読みにも圍繞された、曰く付きのテキスト、それが『借金』なるテキストである。端的に言おう。哀切味を帯びた物悲しい物語などという評し方は、カバツキイという「謎めいた人物」⁽⁹⁾の人物像を余りに素朴に読みとりすぎた、皮相極まる、実に浅はかな評し方なのだとも言いたげな、そんな「異種」なる説が唱えられてきたということだ。「物

語を丁寧に読むとカバツキイなる人物は一寸とした詐欺師であることが示唆されている」⁽¹⁰⁾と云うのである。実に刺激的な興味深い解釈ではないか。もしそうなら、哀切味を帯びた物語だなどという解し方は根底からそれこそ大きく揺らぐこととなり、誤読もあらわな空論と墮すしかないのだから。ともあれ、この件につきとりわけ詳しく説いているオックスホーンの所説を急いでここに要約してみることにする。

カバツキイなる人物は、「リーブから何年も前に100ドル借りていながらそのことを否定している」⁽¹¹⁾ような人物だ（——オックスホーンはこのように記しているが、正しくは返済していないはずなのに「返済したと言い張っている」と記すべき所である。しかし今はこのことについては問わないことにする）。そのことから推せば、亡き妻の「墓石」代として「200ドル」必要なだというその話も信憑性のある話しとは言い切れないだろう。その話をリーブに語る「直前」に、彼は「流し」の所に行き（念のため言い添えておくが、この時「流し」のある「奥の部屋」にいたのはカバツキイ一人であった）、「ハンカチ」をぬらして“dry eyes”（——しばらく原語のままとしておく）にあてている。リーブは「たやすく心を動かされ涙を流す」のだが、実はリーブに涙を流させた人物・カバツキイはといえば「偽りの涙」を流していたのではないのか。ベッシーが「ボルシェビイキ」によって無残な死をとげた父親の話しをはじめとした、これまでの長き苦難の人生を、そしてリーブ亡きあとの不安を語り、金銭の必要性を説くさい耳を傾けていたカバツキイは、思わずして「両手で耳をふさぐ」のだが、おそらくそれは、リーブに告げた己れの偽りの言葉に「罪意識」を覚えたからに相違ない。「異説」の論旨はほぼこんな所だ。

レオをして「トリックスター」と思わしめている『魔法の樽』（“The Magic Barrel”）のかのザルツマンしかり⁽¹²⁾、アルバートに「ずる賢い詐欺師」と言わしめている『銀の冠』のラビ・リフシツ、「天使」にして「いかさま師」のレヴィン（『天使レヴィン』“Angel Levin”）しかり、という具合にいかにも胡散臭い「謎めいた人物」を登場させることは、マラマッドという作家にあっては別段異とするには足りぬことではある。そのようなコンテクストから考えれば、たとえその種のあらわな呼称がそこに使われていないにせよ、「謎めいた人物」カバツキイが詐欺師であったとてまあおかしくはないだろう。加えて言えば、テキストの語りそれ自体が一義的な解釈を拒むべく、どこやら意図的に曖昧なものとなっているそんなフシもなきにしもあらずだ。しかし果してカバツキイは、真実パン屋夫婦を欺こうとした、卑劣な悪人、詐欺師であったのだろうか。その解釈は一体目配りの行き届いた遺漏のない読み、「受容理論」の唱える「テキストと読者間の相互作用から生じる所産」⁽¹³⁾たりえていると安んじて言えるのであろうか。

カバツキイが『勘定書』のウイリーさながらに、リーブという他者の「信頼」を裏切り、「15年前」に借りていた「100ドル」を返済していないことはあるいは否定し得ない

事実かもしれない。いや、おそらくそうに違いない。読者が全幅の信を置くに値する善良そのものの人物・リープによってそのことは告げられているのであるから。語り手はそのことを意図して、リープの善人ぶりを形象化しているはずだ。しかし、「正しきこと」(『アシスタント』*The Assistant*)をしなかった「律法」違反者であった一事をもって、ただちに、「墓石」の話もコン・マン、カバツキイが作り上げた偽りの話であったなどと短絡的に考えていいのだろうか。そもそも問題なのは論拠の一つとして挙げられている「偽りの涙」の一件だ。“dry eyes”にシンクでぬらしたハンカチをあてるその行為は同情を買うための策略であったという解し方は、それなりに納得せしめるものがない訳ではない。偽りの涙を流すことはいかに詐欺師といえども、そうたやすいことではないはずなのだから。しかし、畢竟それは一貫性を構築すべく措定された、ありうる論理の一つにしかすぎない。カバツキイの眼は、なんの事は無い、「ドライ・アイ」という病を患っていたにすぎないともとれるのだから。『銀の冠』のラビ・リフシツの「涙目」(“wet eyes”)とは丁度逆に、涙液の分泌不足が引き起こす眼の一つの障害にしかすぎなかったと読んだとて、おそらくどこにも不都合は生じまい。いな、むしろそのように解さない限り不確定な「空白部」、「ギャップ」は補填される所か、逆にすげなくプロット展開の熱い連鎖を断ち切ってしまう、背馳甚だしい不都合千万な亀裂が生じてしまうのではないのか。

「肺炎」で息を引き取るモリスは言わずもがな、「青白い顔」をした「ガン患者」さえ登場している『アシスタント』の世界にはいささか及ばずとも、リープの「ヘルニア」、さらには「白内障」への言及、そして「チフス」で亡くなったベッシイの先夫への言及、あるいは、かつては「毛皮の裁断師」をしていたカバツキイの「関節炎」、そしてヨブ(『ヨブ記』)の風情さえ漂わせた「腫れ物」⁽¹⁴⁾への言及といったように、この作家一流の生きる「苦悩」を表象する一大標識ともなっている病への言及におよそ事欠いてないこのテキストにあって、「ドライ・アイ」なる「病名」がたとえ出てきたとて少しも奇異ではない(——因みに、カバツキイの持っていた「ハンカチ」が「しみ一つないきれいなハンカチ」であったと殊更のごとくに叙されているのも、このことと無関係なことではないはずだ)。それだけではない、シンクでぬらしたハンカチを眼にあてることが、「涙」に見せかけるための故意の「偽装」であったとするならば、リープ及びベッシイをしてその「涙」に気づかせなければ意味がないというもの。そのためにはシンクのあった「奥の部屋」から夫婦が口論していた「店先」に時をおかずして行くにしくはない。それが、「合理的に把握できる因果性の彼方」⁽¹⁵⁾の世界を構築せんとしている訳では毛頭ないだろうこの「古典的」テキストにおける、自然な論理、条理というものだ。しかし、その伝でゆくとカバツキイのなしたことと言えば、「不自然」、「不合理」この上ないことだった。自明の理は

どこへやら、「しめったハンカチ」をたたむと、「外套」のポケットにしまい込み、そしてやおら「小さなペンナイフ」を取り出して所在なげに、なんと「爪」を削り始めている始末だ。更に言えば、しばらくしてリーブがベッシイに「大切な人」のためなのだと訴えかけていた「店先」にカバツキイが行った時、リーブ、ベッシイの二人がカバツキイの「涙」に気づいた風では少しもないのだ。「リーブはたやすく心を動かされ涙を流す」のだが「カバツキイは偽りの涙を流していた」のではないのか、と言うが誤解も甚だしい。リーブが涙を流したのは、カバツキイの「涙」を目にしてのことでは断じてない。いつに、墓石の費用として「手付金」こそ支払ったが、残金の「200ドル」を今だに支払えず、「5年」もの長きの間、ドーラの墓が墓石のないまま放置されているという、惨めこの上ないような話をカバツキイが語ったからである。一体墓石のない墓の話しがリーブの涙を誘わないはずであろうか。けだし、ドーラのかくある墓は、「下等な人間共」によって「虐殺」されこの世を去っていった同胞ユダヤ人の、「墓標のない共同墓地」⁽¹⁶⁾を否応もなく呼び起こしたはずなのだから。かくある倍音を重く響かせた痛ましい話しであったればこそ、旧知の間柄でもなんでもないベッシイの心をもゆくりなくも揺り動かしたのである。しかし、他のなによりも反証として挙げうるものが一つある。カバツキイなる人物の真諦を見極めるのに欠かす訳にはゆかないその「手掛り」⁽¹⁷⁾が。「沈黙の言語」⁽¹⁸⁾が湛えた豊かな潜在力を、ここぞとばかりに存分に働かせ、カバツキイの実像をありありと描きあげているとおぼしき一節が。リーブがベッシイにカバツキイを紹介しているくだりだ。

客の応対をおえ、「奥の部屋」へと「息を切らせて」やってきたベッシイに、リーブは「こちらはわしの古い友人なんだ」、と言って「スツール」に腰を下ろしていたカバツキイを改めて紹介する。「不安気な顔つきをして」ベッシイが頷く。カバツキイも帽子に手をやりこれまた挨拶をかえす。さて、このような脈絡のもと次のような一節が続く。

「この人のお母さんは——どうか神のご加護があらんことを——何度もこのわしにあったかいスープを飲ませてくれたんだ。この国に来てからもこの人の家で何年もの間食事をさせていただいたんだ。すごくいい奥さんがいるんだ——ドーラというんだが。お前にもいつか会える機会があるだろう——」

カバツキイは小さな声でうめき声を漏らした（“Kobotsky softly groaned.”）。

組上に載せたいのは原文を付した最後の一文に見てとれる、カバツキイの漏らしている「うめき声」だ。この時カバツキイは何故「うめき声」を、いや正確に言い直そう、何故「小さな声でうめき声」を漏らしたのだろうか。答えは至って単純明快。少なくとも

も、カバツキイ詐欺師説が「解釈の妥当性」(ハーシュ)を欠いていると解する見地からすれば。カバツキイがうめき声を漏らしたその理由は、今やこの世にいない妻・ドーラのことをリープがそうとはつゆ知らず、ベッシイに「お前にもいつか会える機会があるだろう」などと、およそ実状とは遠くかけ離れたことを語ったからである。(——煩瑣なきらいはあるが注釈めいた説明を少々加えておきたい。リープがそのように述べたのは、一部で誤解されているようにカバツキイの「作り話し」を真に受けたからなどではない。カバツキイの話しを最後まで聞くことなしに、「金」はドーラの手術代であろうと勝手に一人合点してしまったからだ。ドーラがとおにこの世を去っているなどとは思ってもよらなかったたまでのこと)⁽¹⁹⁾。会いたくとも二度と会えないドーラのことを、あたかもいつか会えるかのごとくに語っているリープの話しは、その全き不可能性をもって、カバツキイの悲しみをいやましにと掻き立てざるをえなかったのである。カバツキイが思わずして、「うめき声」を発するのむべなるかなというものではないのか。

それとも、このうめき声も「涙」同様に、リープとベッシイを操るための悪どき作意であったのだろうか。一般論風に言えば、作意を働かせ、感情の込められた「声」を発することはた易いとまでは言えなくとも、⁽²⁰⁾ありえないことではないだろう。その意味ではそのような読みを道理無きものとして、言下に否定し去る訳にはゆかない。但しカバツキイのうめき声はその類の一般論に難なく解消されうるか否かは、無論全く別問題ではあるが。所でカバツキイのうめき声はいかなるうめき声であったのか。それは単なるうめき声ではなかった。見ての通り、それはあくまでも「小さな声」でのうめき声であった。しばらくのちに、ドーラの実状をカバツキイから知らされたリープの発するそれとはいささか様相を異にしている(——リープのうめき声にはなら限定語が付されていない——“Lieb groaned”)。殆ど読み落とししかねないような細部ではある。しかしこの細部に宿された意義は決して小さくはない。なぜなら、その「声」は言うなれば「傍白」としてあったにすぎずリープ、ベッシイには聞こえなかったという重要なことを告げているはずなのだから。うめき声のありようがわざわざ記されているその理由を、一体他のどこに求められようか。果たせるかな、リープ、ベッシイがその「声」を耳にしたなどということはどこからも読みとれない(——「涙」の件と同様のことがここで起こっているのも偶然ではない)。つまりその「声」は、特権的立場を付与されている読者は措くとして、リープ、ベッシイという他者に対する志向性を有した、意識的な伝達行為としてあったのではないということだ。リープの語った「不用意」な言葉を契機とし、カバツキイは悲しみを一人反芻していたというにすぎない。今や亡き妻への想いを、一人密かにうめき声を漏らしてあらたにしているような人物、それがカバツキイなる人物なのである。そんな心性を備えた人物が、よもや狡智にたけた詐欺師であろうはずがあらうかと

言いたいのである。

念のため傍証としてカバツキイの見せているもう一つの情動表現を挙げ十全を期そう。先の引用部にすぐ続いた一節である。

「そんなにいい人ならなぜ会わせてくれなかったのよ」ベッシイは言った。10数年もたっているというのに、今だに先妻の特権を嫉妬していたのである。

「いつか会えるさ」

「なぜなのよ」

「リープ——」哀願せんばかりにカバツキイが言った。

「わしだって15年もの間会ってないんだ」リープは事の次第を打ち明けた。

「なぜなのよ」ベッシイは尚も問い詰めた。

リープはしばらく黙っていた。が、やがて「悪かった」と言った。

カバツキイは顔をそむけた (“Kobotsky turned away.”)。

これまたスポンテニアスな表現たりえている、「顔をそむけた」カバツキイの身体動作は、この人物の基底を証すシグナル、「うめき声」のヴァリエントだ。「小さなうめき声」という「周辺言語」の意義は、「身体言語」の意味作用を問ういわゆる「動作学」(“kinesics”) 的観点からも示唆されているということだ。

ベッシイが来し方の苦難の人生を、そしてリープ亡きあとの不安を語ったさい、カバツキイが「両手で耳をふさぐ」のも、己れの虚言の悪どさに殊勝にも罪意識を覚えたからなどでは全くない。労苦に満ちた苦難の人生を自らも歩いてきていたカバツキイは、ベッシイの語る不幸、不運な話しに耐えられなくなったまでだ。カバツキイがふと漏らす「小さな声」の「うめき声」という、すぐれて陰影に豊んだその表現の喚起しえている大事な意義に気づきさえすれば、テキスト構成の課している厳たる「規制」を無化した、逸脱甚だしいそのような「解釈不足」⁽²¹⁾の愚をおかすことは定めしなかったであろう。カバツキイの胡散臭さを論じるのであれば、一連の振舞にあらわれた、胡散臭さの端緒となっている、「うめき声」が内包したその意義をこそまずは精査すべきではなかったのか。ハンカチでぬらした「涙」の意味も、「両手で耳をふさぐ」所作の意味も、これ全て「小さな声」での「うめき声」の出处さえ分明化されれば容易に説き明かすことができたはずなのだ。それをうかつにもないがしろにしてしまった落ち度から、恣意的な誤読が次々と生み出され、なんとカバツキイは哀れにも悪どき詐欺師に仕立てあげられてしまったという次第である。

長々とカバツキイの人物像につき検討してきた訳だが、どうでもいい無用な詮索をし

てきたつもりはない。この人物がペテン師であるのか否かの問題は、例えば再三引き合いに出している『銀の冠』のミステリアスな登場人物、ラビ・リフシッツがアルバートの疑うように、「まやかしの魔術」を行使する「ずる賢いコン・マン」であったのか、それとも「奇跡」を引き起こす「聖なる人」であったのかという問題とは、質的にレベルを大いに異にした、あだやおそろかに扱えない問題なのだ。「信仰療法師」⁽²²⁾を自称するリフシッツが詐欺師にすぎなかったのか否かの弁別は、何よりも「重い病い」の床に臥したガンズの子・アルバートの「愛」なき「心」を浮き彫りすることをテーマの基軸に据えた『銀の冠』にあっては、二義的な事柄以上のものではない。しかし、ことカバツキイの場合には、それと同列に論ずる訳には到底ゆかない。テキスト総体の投じるメッセージの深浅度に、じかにそして深く関わってこざるをえないすこぶる重要な問題としてそれはあるのだから。「うめき声」の蔵した意義を説いただけでは論を尽くしたことはない。以下この問題につき説いてみたい。

III

「墓石」代の「200ドル」を借りられなかったカバツキイは、リープと「口付け」の挨拶を交わし、「永遠」の別れを告げて去ってゆくのだが、この結末部の与える含意は、カバツキイという人物の位置づけによって逕庭著しい差異を生み出さずにはおかない。カバツキイ「コン・マン」説を標榜する評者なら、おそらくこう言ってなんら憚らないだろう——べてん師・カバツキイはフリーマン（『湖上の貴婦人』“The Lady of the Lake”）にもどこかあい似た、当然の断罪を受けたまでだと。利己的とも思えるようなベッシーのあけすけな言い分を語り手が容認している感を与えているのも驚くべきことでは少しもないと。現にこのような主旨のことをオックスホーンは述べている。しかし、カバツキイをべてん師と規定する謂われがどこにもない以上、この「整然」たる裁断はなんら説得力をもちえていない。この物語の本体はそのような規矩に沿った凡百な勧善懲悪の物語などとはするどく一線を画しているのだ。この物語の緊張の要は、月並みな腑分けを強固に拒む、「倫理上のジレンマ」⁽²³⁾を、善・悪、正・邪という概念図式で容易に包摂しえない何事かを現出せしめている所にこそあるのだから。網み目からきれいにこぼれ落ちたその何事かの顕現にこそ、この一篇の特異な活力が存しているのだから。

返済してない「100ドル」の借金がありながら既に返したと言い張り、再び金を借りにくるカバツキイの精神は、確かに下劣極まる精神だろう。しかしそのみをもってカバツキイなる人物を評してこと足れりとする訳にはゆかない。「5年」もの長きに亘り、墓地に放置された亡き妻の墓石のためにと金を借りにきた哀れなカバツキイを看過して

いはずがあるのか。「殆ど禿げあがってしまった頭」、「惨めさで光り輝いたような顔」、まるで「亡霊」さながらの「やせこけた」カバツキイの呈したその風情は、「善人」カバツキイの哀れさを尚一段と強めていよう。にもかかわらずカバツキイの願い、哀れを誘うその願いは空しく潰え去った。救いの手が差し伸べられなかったからだ。とすると逆にリープそしてベッシイこそが、断罪さるべき当の人物であったということにあいなるのだろうか。人の道・「ハラカー」(“harakhah”)⁽²⁴⁾を踏みはずした罪人であったことに。

例えばリープ。成程、いかに結果的にではあろうとも、詰まる所、妻の言に従い「旧友に金を拒んだ」⁽²⁵⁾ことになるリープには、妻を説得し切れなかった咎のあることは否めないだろう。「練り粉」の中にイーストならぬ辛苦の「涙」を落としてパンを焼く、そんな惨めな過去をもち、貧しさのなんたるかは誰よりも良く知っていたはずのリープであればなおのこと。しかし速断は慎もう。カバツキイの「罪」をもう「過去」のことだとして許す寛大な心をもっていたのがリープではなかったのか。「僅かの金」とは言え所有できる身となった今、「心の友」とそれを「分かち持つ」ことができないとしたなら、一体なんのために生きているのか、と一心に妻のベッシイに訴えかけていたのがそのリープではなかったのか。そんな人物をどこまで人は責められようか。むしろこう言った方が遥に正酷を得ていよう——リープはりっぱに「メンシュ」(“mensch”)になりえていたと。

ベッシイとて安易な判断は下せまい。同情こそすれども夫の訴えをもはねつけて、カバツキイの願いを頑なに拒んだベッシイは、倫理コードに背いた邪悪なる人物、侮蔑すべき人物でもあるかのように見えなくはない。利己心余って、「他者に対する責任」⁽²⁶⁾をすっぱり欠落させた、指弾さるべき悪人でもあるかのように。ごった返さんばかりに客が出入りしている店の繁盛ぶりが殊更のごとくに描かれていることを想い合わせれば、その感はいよいよ募ろうというものか。しかしそのことは果たしてベッシイを貶める確たる論拠になりえているのだろうか。幸か不幸か、そのような汚名に抗する事どもを、あまたベッシイは有していたのではないのか。今でこそくらしでゆける身になっていたとはいえ、幼き頃愛する父親を「ボルシェビイキ」によって撃ち殺され、結婚一年後には「チフス」の病で「優しかった」夫を亡くし、自分を犠牲にしてまでアメリカに來させてくれた兄とは言えば、「ヒットラー」の「焼却炉」で妻子共々焼き殺されてしまうという、苛酷な行路を生き延びてきたのがベッシイであった。しかし「ホロコースト」の悲惨な運命を免れたとはいえ、生きることの苦悩そのものから解放されたという訳では一向ない。手術の費用を覚悟せねばならない「白内障」をわずらい、尚また生命保険にも入れない体の弱い夫を持ち、更には、夫亡きあと一人身となったなら、「どこに行った

らいいのか]、「金のないこの私を誰がめんどろを見てくれるのか」という行く末への不安に絶えず付きまといわれていたのが他ならぬベッシーであった。不安におののくベッシーには、「黒々としたレンガ」、「黒焦げになった死体」となって妻子共々「焼却炉」で果ててしまった兄の惨めな命運は、どこかに消え失せた、彼方の遠い昔の出来事などでは毫もなかったのだ。金もないまま一人この世に放り出されたなら、行き着く先は唯一つ、「焼却炉」という「オープン」でしかないと固く信じて疑わなかったのである。エルネスト（『湖上の貴婦人』）そしてグルーパー（『弔い人』“The Mourners”）のあの「帽子」⁽²⁷⁾の反復同様に、都合三度に渡って反復され結末部では文字通り「前景化」されるに至る、「異様化」された「オープン」の果たしているその役割は、単に陰惨なかつての世界を蘇らせているだけではない。「さかまく煙」を吐き出しながら、「パンの塊」を黒焦げにしている「ガス・オープン」は、ベッシーの払拭し難き不安な想念のありかでもあったのだから。これを称して大仰な一人悦に入った自己憐憫、飛躍も甚だしいいたずらな感傷だなどと言うのはあたらぬ。リープを沈黙させ、カバツキイをして「両手で耳をおおわせた」暗澹たる言辞を、どうして感傷の一語でもってあっさり片付けられようか。一種倒錯じみた、エヴァ（『あわれみ』“Take Pity”）の自虐的な「感傷」⁽²⁸⁾などとは無縁なその内実を前にして。不幸な痛みの道を歩んできたその上に、今もって、生きてゆくことへの不安の只中からほんの一步も逃れられないベッシーであつたればこそ、「人間であることがいかなることを意味するのか」（『白痴を先に』）知りながらも、カバツキイの哀れな願いをも拒まざるをえなかったのである。かくして、カバツキイは願いも空しく、一人立ち去るしかなかったのである。

もはや贅言は無用だろう。このテキストはカバツキイという悪辣なペてん師の蒙る当然の顛末を、それこそ鋳型よろしく描いたような、安きについた一篇などではおよそない。リープ、ベッシー、そしてカバツキイという登場人物のそれぞれが不幸にして陥ったその苦境を、荒涼たる救いのなさを細やかにして骨太に描きあげたこの一篇は、凡庸な道学者のものしたような、狭隘な物語などとはもともと縁遠い一篇なのだ。マラマッドの「苦の世界」は、黎明をその「超克」⁽²⁹⁾をいつも掲げている訳では決してない。

（本稿は〈沈黙の言語〉を視座としてマラマッドの諸作の再読を試みようとするその論考の一部である）

註

- (1) See Glen A. Love, “Winesburg, Ohio and the Rhetoric of Silence” in *American Literature* XL (March, 1968), p.52.

- (2) 「生活の糧」を意味する“Panessa”なる名前とイーディッシュ語との関連については次を参照されたし。Robert Solotaroff, *Bernard Malamud: A Study of the Short Fiction*, (Twayne Publishers, 1989), p.137. Fred Kogos, ed., *Book of Yiddish Proverbs and Slang* (Poplar Books, 1970), p.215. Lawrence Lasher, ed., *Conversations with Bernard Malamud* (Univ. Press of Mississippi, 1991), p.48.
- (3) この件については別稿で既に触れておいた。拙稿「ザルツマンと〈死者のための祈り〉——『魔法の樽』考」(『オペロン』〈南雲堂〉第26巻第1号所載)、67頁。
- (4) 野村雅一著『しぐさの世界』(日本放送出版協会・昭和58年)、103頁。
- (5) Sidney Richman, *Bernard Malamud* (Twayne Publishers, 1966), p.108.
- (6) デイヴィッド・ロッジ著、伊藤誓訳『パフチン以後』(法政大学出版局・1992)、141頁。
- (7) Michael Argyle, *Bodily Communication* (International Univ. Press, Inc., 1988), p.139.
- (8) Cf. Judee K. Burgoon and Thomas Saine, *The Unspoken Dialogue* (Houghton Mifflin Company, 1978), p.84.
- (9) Kathleen G. Ochshorn, *The Heart's Essential Landscape* (Peter Lang, 1990), p.70.
- (10) Ibid, p.70. このような解し方はオックスホーン一人のものではないのだが(一例えば岡田春馬著『マラマッドの短編小説』〈近代文芸社・1998〉)、161頁等を参照願いたいここでは特に「論拠」を明らかにしているオックスホーンの所説を挙げておく。
- (11) Kathleen G. Ochshorn, op. cit., p.70.
- (12) 「トリックスター」ザルツマンに関しては(3)の拙稿でやや詳しく説いている。
- (13) Wolfgang Iser, “Interaction between Text and Reader” in *Readers and Reading*, ed. Andrew Bennett (Longman, 1995), p.24.
- (14) See Dorothy Seidman Bilik, *Immigrant-Survivors* (Wesleyan Univ. Press, 1981), pp.61-62.
- (15) ミラン・クンデラ著、金井・浅野訳『小説の精神』(法政大学出版局・1990)、67頁。
- (16) Alan Cheuse and Nicholas Delbanco, eds., *Talking Horse: Bernard Malamud on Life and Work* (Columbia Univ. Press, 1996), p.187.
- (17) Raman Selden, *Practising Theory and Reading Literature* (Harvester Wheatsheaf, 1989), p.119.
- (18) Edward T. Hall の著した一書 (*The Silent Language*, 1959) の書名にもなっているこの概念の委細については(3)の拙稿 (70-71頁) を参照してもらいたい。
- (19) カバツキイが言いかけた “My wife needs ——” なる言葉をリーブが早まって勝手に解釈してしまったということである。Cf. Ben Siegel, “Victims in Motion: The Sad and Bitter Clowns” in *Bernard Malamud and the Critics*, eds. Leslie A. Field and Joyce W. Field (New York Univ. Press, 1970), p.130.
- (20) Cf. Michael Argyle, op. cit., p.78.
- (21) ステファン・コリーニ編、柳谷・具島訳『エーコの読みと深読み』(岩波書店・1993)、172頁。この表現は「過剰解釈の弁護」と題された同書第5章に見られるジョナサン・カラーの言葉である。

- (22) Cf. Lawrence Lasher, ed., op. cit., p.51.
- (23) Charles E. May, "The Bread of Tears : Malamud's 'The Loan'" in *Bernard Malamud : A Study of the Short Fictin*, p.171.
- (24) 「ハラカー」については次の拙稿で触れている。「マラマッドと〈沈黙の言語〉——エルネストとグルーバーの『帽子』」(『学習院女子短期大学紀要』第33号、1995)、199頁。
- (25) Evelyn Gross Avery, *Rebels and Victims : The Fiction of Richard Wright and Bernard Malamud* (Kennikat Press, 1979), p.24.
- (26) Jeffrey Helterman, *Understanding Bernard Malamud* (Univ. of South Carolina Press, 1985), p.20.
- (27) 「帽子」の有した「啓示性」については(24)の拙稿(195-196頁、201-202頁)で私見を述べておいた。
- (28) 周知の通りエヴァの自虐的な「感傷」に関しては解釈の分れる所だが、このことについては『あわれみ』を論じた別稿(『オベロン』第27巻第1号〈南雲堂〉32頁)を参照してもらいたい。
- (29) Louis Harap, *In the Mainstream : The Jewish Presence in Twentieth-Century American Literature, 1950s-1980s* (Greenwood Press, 1987), p.122.

(よねやま ますみ 国際コミュニケーション学科教授)